自然の中で都会と農村が仲良くなろう！

特定非営利活動法人 森の学校［栃木県那珂川町］

テーマ

月島・健武
もんじゃでどんなもんじゃ

活動の概要

都市と農山村の子ども交流キャンプの実施等により、木造の廃校舎を活用した地域の再生を目指すとともに、銀座での写真展の実施、月島の生ゴミの堆肥化に取り組んだ。

設立年月　1993年7月（2003年 法人化）
メンバー数　150人
代表者名　佐伯 剛正
連絡先
〒104-0061
東京都中央区銀座七丁目18-13-203
特定非営利活動法人 森の学校
徳本 洋子
TEL　03-5565-1144
FAX　03-5565-1199
e-mail　morinogakkou@kankyou.info
URL http://www.morinogakkou.jp/

わたしたちについて

里山の木造校舎（廃校）を主な拠点に環境教育を行い、自然の奥深さ生命の尊さへの気づきと、人や自然とのふれあいの中から豊かな心を育み健全な人間性を形成し、全ての生き物が共に暮らすことができる社会を目指しています。

活動に至った理由や背景

森の中にある本当の学校

森の学校は、“里地里山の木造で歴史のある校舎とそのまわりの自然”を主な舞台に、子どもたちや家族、大人などへの自然体験・野外体験・里山体験などの環境教育を提供し、自然の中から生きるための知恵とチカラを学ぶ自然学校です。校舎は学びの原点。森の学校では、人や自然とふれあう中から、私たち人間を含めたさまざまな命（生物多様性）を学び、命の尊さを理解し、その命を未来に引きついでいく活動を、1993年から行っています。

群馬の森から栃木の森へ

「森の学校さん、すみません。村議会で決定したのですが……」、老朽化のため校舎の契約更新を行わないことになったとの、村役場から突然の電話でした。1995年から群馬県南牧村の木造校舎を拠点に活動していましたが、村議会の決定は如何ともできず、新校舎探しが始まりました。

そこで出合ったのが、栃木県鹿沼市の「前日光・かぬま校」と栃木県那須郡那珂川町の「那須・なかがわ校」です。「前日光・かぬま校」は、校舎横を流れる清流、瀟洒な校舎に一目惚れ。「那須・なかがわ校」は、校舎をとりまく、これぞまさに、という日本の里山風景に心奪われました。

里山の学校は地域のシンボル

新拠点で、地域の家を一軒一軒訪問してご挨拶させていただきました。そこで共通したのが、学校があった頃、地域の人々が一緒になって運動会や校舎の清掃をやっていた楽しい思い出と、廃校になって人々が集まることがなくなった寂しさです。里山の学校は地域のコミュニティの中心であり、地域のシンボルなのだと深く実感しました。

木造の廃校舎を活用し里地里山を再生
子どもたちと共に持続可能な地域づくり

木造校舎は貴重な地域資源。少子高齢化・過疎化に伴い、木造校舎が失われ、コミュニティが失われ、農地は放棄され、里山が荒れ、生態系が乱れ、生物の多様性が失われていく……。そうして人間の存在さえも脅かされていく。

まずは、次々と日本から失われていく、貴重な木造校舎とその周りの里山を再生・保全していくことが重要だと実感しました。

そこで大切なのは、地域を持続させていく主体となる人材の育成“次世代の育成”です。子どもたちへの環境教育を実施し、未来を考え、行動できる人材を育成。農山村・都市が関わり合うことで互いが成り立っていることを、農山村・都市の子どもたちが交流体験の中から実感として理解することができるように、都市と農山村の子ども交流キャンプを企画しました。

さらに、地域資源が地域内外から認知されることによって、コミュニティも活性化。それを活動の持続、地域の持続的発展につなげようと、地域色を出した商品の開発にも着手しました。

7月18日（日）～19（月）1泊2日
子ども交流キャンプ

栃木県・那珂川町と東京・月島の子どもたちの交流キャンプを、7月18日（日）から19日（月）の1泊2日で、森の学校「那須・なかがわ校」で開催しました。開催にあたって、那珂川町と那珂川町教育委員会の後援をいただき、川遊びのライフジャケット等も教育委員会から提供していただきました。

校舎裏の30年程耕作を放棄されていた谷津田（棚田）を、開墾・再生し、古代米などを育てています。その谷津田の“温水田”は子どもたちに大人気。通称“トンボ池”と呼んでいるのですが、谷津田の再生とともに、様々な生き物がやってきて、“生き物たちの宝の池”になっています。トンボ池は、校舎からこの谷津田へと向う道・田んぼ・山から清流が流れる沢とともに、最高の自然観察エリアです。

鮎の川として有名な武茂川での“川ガキ体験”は、月島の子どもたちにとって感動と驚きの連続だったようです。日常、川に囲まれて生活しているにもかかわらず、川の中へ入ることがない月島の子どもたちは、地元漁業組合の支部長さんからの話を伺ったあと、早速川の中へ。石をひっくり返して生き物を探す方法は漁協組合の支部長さんが教えます。川の茂みの中から生き物を探す方法は、地元の子どもたちが教えます。月島の子どもたちは、川の中の生き物探しにもうすっかり夢中です。川のおだやかな流れの中での“川ガキ体験”は、とても印象深く、これまで経験したことのない楽しい体験だったようです。

月島の子どもたちを、那珂川の少し年上の子どもたちがとても上手にリードしていました。これは、今回の交流キャンプの大きな成果の一つです。こうした子どもたちの交流や体験が大人になってからも活きて、それぞれの地域にも広まっていってくれればと思います。

今回のキャンプのもう一つのねらいは、“月島の巨大もんじゃを那珂川で!!”でした。地元の育成会のお父さんお母さん方にご協力をいただき、予定以上の100名もの人々が校舎に集まりました。地元ケーブルテレビや、地元新聞、那珂川町の広報課の方々にもおいでいただき、また、消防車も校庭に待機して、たいへん賑やかになりました。

夕食は長径 2.5m 短径 1.5m の楕円形の巨大なもんじゃ焼き。地元育成会の方々が中心になって作ります。約 40kg の炭を使い、鉄板もクレーン車で運び込みました。

左／校庭にドームテントを張る頃には、もうみんな仲良しです。右／“川ガキ”ということばは死語になりつつありますが、ここではみんな“川ガキ”でした。漁業組合の支部長さんからも川のいろいろなことを教えてもらいました。

巨大もんじゃは、地元育成会の方々を中心に、学校の給食室を使いながら、女性のサークルや地元農家の方々のご協力で、長径2.5m、短径1.5mの楕円形の超大型もんじゃが、森の学校の校庭に出現!!大成功でした。

H&C財団の大内さんにもお越しいただき、ご挨拶をいただきました。栃木県の助成第一号とお聞きし、身の引き締まる思いでした。月島からは、もんじゃ振興会の村田会長のご尽力でブルドックソースからもんじゃ用のソースなども提供していただき、校庭には“月島もんじゃ”ののぼりが立ち並びました。月島から参加した子どもたちは「月島もんじゃ」のことを自慢げに、そして嬉しそうに、那珂川の子どもたちに話をします。そのもんじゃを月島と那珂川の子どもたちは一緒にほおばり、そのうち校庭で追いかけっこをして遊びだし、校舎にほほえましいコミュニティが溢れました。

銀座プロムナードギャラリーは、銀座駅と東銀座駅間の地下通路にあります。オープンスペースなので、いろいろな人に見てもらうことができます。

8月8日（日）～8月15日（日）
遊休農地で小麦の収穫と粉ひき

学校の校舎前の遊休農地で、実験的に小麦を育てました。この粉が、月島のもんじゃの粉に使われるようになることを考えながら。

無農薬で化学肥料も使わず、しかも春になってから種を播いたので、地元の方々も興味津々。小麦畑の手入れをするたびにやって来て、「この前、芽が出ていたよ」などと話しかけてくださいます。

当初は、収穫自体を心配していましたが、大方の予想を裏切って、大量に収穫することができました。……とはいえ、播種量が少なかったので、収量は重さにして2kgです。しかし、これほどまでに育つとは、地元の農家の方も驚かれました。

私たちの活動を、学校のまわりの方々は、とても温かく見守ってくれます。今回のこのような挑戦が少しでも地元の方々に伝わっていったらと思います。

9月18日（土）～10月16日（土）
生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）開催を記念した“命のつながり＝生物多様性”をテーマとした写真展開催

当初、借用できるかどうかわからなかった“銀座プロムナードギャラリー”を借りることができるようになり、急遽この事業を組み入れました。

森の学校のテーマ“命のつながり”を支えているのが“生物多様性”であるため、この時期を外しての写真展の開催はありませんでした。H&C財団のご理解をいただき大変感謝しています。写真展では、ソフトバンク クリエイティブ株式会社のご協力もいただき、写真と合わせて生態系のイラストも展示することができ、生物多様性について理解を深めることができました。

今回の交流事業の中心人物のおひとりである月島西仲通り商店会の小林会長にもご覧いただき、「那珂川・月島の交流キャンプの写真、よかったよ！」とお電話をいただきました。また、農業新聞でも写真付でこの写真展を記事にしてくださいました。公道のギャラリーということもあって、銀座を中心に様々な方々から「子どもたちがイキイキしていてとてもよい写真展だよ」というお声をいただき、“一般の人が生物多様性について知るきっかけを作る”という当初の目標は達成することができました。

○「**森の学校の一年間（四季）」写真展**
撮影：佐伯剛正／舘野二朗
協力：財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
　　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
会期：2010年9月18日（土）～10月16日（土）
会場：銀座プロムナードギャラリー（ギャラリースペース7箇所）
展示写真：81点
イラストパネル：20点

月島のお店の生ゴミで堆肥づくり、肥料づくり

月島には、数多くのもんじゃ屋さんと古くからの居酒屋さんがあります。お店では、生ゴミを中心にしたゴミが毎日大量に出ます。現在、それらは毎日回収され、焼却されています。これをどうにかして堆肥化し、資源にして作物づくりに活用できないかと考えました。

様々な課題がある中で、私たちは月島の商店会の会長さんや、もんじゃ振興会の会長さん他有志の方々の協力でお店の生ゴミを集め、栃木の森の学校へ運び、堆肥化･肥料化することができました。今回は、テスト的な実施でしたが、ハードルは思った以上に高く、また数多くありました。最大のハードルは、生ゴミとその他のゴミの分別です。どこのお店も土地を最大限に活用し、限られた厨房スペースの中で営業しています。分別を理解してもらい、更に実行してもらうのはとても高いハードルです。加えて堆肥化する場所の問題です。生ゴミの保管場所、生ゴミ処理機を設置する場所など課題は数多くあります。

月島の肥料で、キャベツを育てる

遊休農地を復活させた校舎裏の野菜畑で、大根や白菜とともに、キャベツも育てました。

そのキャベツには、実験的に月島の生ゴミ肥料を施肥しました。しかし、今回はイノシシの被害にあって残念ながら収穫することができませんでした。

12月17日　大根と白菜の収穫と小麦の芽

野菜畑で作った、大根や白菜は予定以上にたくさんの量が収穫できました。大学生とのコラボによる「もんじゃワークショップ」の素材もこれで万全。
収量／大根　約50本、白菜　約70個

もんじゃワークショップ

大学生を対象に、春休み期間の3月17日（木）にもんじゃワークショップの開催を企画。

もんじゃ焼きの具材には、様々な農産物、魚貝類、肉類が使われています。ワークショップでは、栃木県那珂川町の里山で育てた谷津田の「お米」をテーマ素材にもんじゃの新商品を開発。新商品開発プロジェクトを通して、都市と農山村のサスティナブルな共存型社会のひとつの方向を探る予定……でした。しかし、3月11日の東日本大震災のため、開催をすることができなくなりました。当初は震災の全貌がわからない状況で延期としましたが、残念ながら震災に加え原発問題が発生し、現在事実上の中止という形になっています。

開催日　2011年3月17日（木）12：00～16：10
開催場所　月島社会教育会館
対象　大学生・大学院生
スケジュール
11：30　受付
12：00　もんじゃを食べて、アイスブレイク
12：55　もんじゃのアイディア出し合おう！
13：40　食材の買出し
14：20　みんなでアイディアもんじゃづくり！
　　試食会
15：40　作ったもんじゃ どうだった!?
16：10　終了・解散主催：特定非営利活動法人森の学校
協力：エコ・リーグ（全国青年環境連盟）
助成：財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

脱穀した後、これが自慢の無農薬で育てた小麦です。

「いい堆肥になってね」思いを込めて混ぜ込みます。

立派な白菜。和地さんの足の長さと同じくらいに生長！

もんじゃをつくる予定だった会場、月島社会教育会館の料理教室。

成果と課題

長年放置されてきた農地は、すぐに無農薬栽培ができる

最も大きな成果は、長年放置されてきた農地は、すぐに無農薬栽培ができるということです。谷津田でのお米の立派な出来に、地元の農家の方々も驚かれました。農薬は使わなくても、有機肥料は必要だろうと思っていたのです。

それが、古代米、特に黒米では全く問題なく、立派に実をつけて収穫できたのです。近隣の農家の方々も谷津田を見に来て、評判となりました。今後この地域での耕作放棄地の開墾と古代米の生産に弾みがつけばと思っています。

子ども交流キャンプで生まれた、新しい地元の人々の参画

森の学校は栃木に引っ越したばかりで、地元での知名度は低く、関係性はまだ浅いものでした。それが、このキャンプで一気に知名度が上昇しました。そして何よりも大きな成果は、主婦や魚獲りの名人など地元の方々がキャンプを応援してくれたことです。巨大もんじゃには、100人もの地元の方々が集まってくれたのです。

月島の子どもたちや森の学校を交え、この地域での新たなコミュニティの形が見えたのではないかと思います。

地元育成会との協働事業のスタート

森の学校の活動の核は環境教育です。これまで都市の子どもたちの、自然と直接ふれあうことの中から生まれてくる学びを大切にしてきました。しかし、最近は農山村の父母から、子どもたちが自然とふれあうことが少なくなったと相談を受けます。那珂川町の父母からもそうした相談を受けました。そこで、今回、地元育成会と一緒になって、子ども交流キャンプを企画しました。育成会の方々は、巨大もんじゃのための鉄板の調達や、炭の調達などに大活躍してくださいました。育成会の方のご協力で、巨大もんじゃが実現しました。

今回はあわただしく進めましたが、こらからは、時々顔をあわせながら、地道に互いを理解しコミュニケーションをはかっていきたいと思います。これからがスタートです。

子どもたちの「ふりかえりシート」。さまざまな経験が楽しく描かれています。

互いに学びあう都市の子どもと農山村の子どもたち

月島が全員女の子で、那珂川がほとんど男の子だったからかもしれませんが、最初は互いに照れていました。しかし、谷津田のトンボ池で、カエルと遊んでいるうちに、次第に打ちとけ、夜のもんじゃ大会の頃には、一緒に校庭で追いかけっこをして遊び出しました。

翌日の川遊びでは、地元の子どもたちの、川に入った月島の子どもたちに対しての様々な気配りなども発見しました。月島の女の子も、校舎に着いた時には、エアコン･エアコンと言っていたのが、翌日には汗びっしょりになりながら、地元の男の子たちと一緒に校庭を走りまわっていました。

また、川に入るのははじめてという月島の女の子たちが、ヤゴ、シマドジョウ、クロカワ……水生昆虫にとても興味を抱き、いつまでもいつまでも川の生き物探しに夢中になっていました。たった1泊2日でも子どもたちに変化があります。

生き物に直接ふれることの大切さや、自然の中で活動する楽しさを学び、山や川で遊ぶことで自然への危機意識を学ぶ、そして、自分が知らないことを子ども同士で教えあって学ぶ。さまざまな面を学ぶことができ、さらに交流キャンプの効果を学ぶことが出来たキャンプでもありました。未来を担う子どもたちへの環境教育の効果と重要性を実感しました。

対象者を限定しすぎない　相応の準備期間が必要

子ども交流キャンプにテーマ性を求めすぎ、最初から対象者を狭く設定しすぎました。少子化している町で、対象者を旧学校区の育成会に限定したこと、都市においても、子どもが減少している月島に限定したことによって、参加を狭き門にしすぎたようです。対象地区以外からの参加問合せはありましたが、丁寧にお断りしていました。今後は、ゆとりを持って参加者を募りたいと思います。また、地域への浸透には時間が必要でした。やはり、1年以上の準備期間が必要だったと思います。

実現のためには、はじめのハードルは低く設定

もんじゃ振興会という組織の性質上、会として実施するためには会員の同意が必要となります。しかし、新しいプロジェクトを始める時、全会員の同意を求めながら進めるのはハードルが高いようです。今後は、有志でのプロジェクトも検討していきたいと思います。

プロジェクトを通して、
新たなコミュニティの手応え

交流プロジェクトを実現できたことは、わたしたちNPO森の学校にとって大きな成果です。こうした成果を、森の学校の2つの校舎（拠点）、そして、森の学校の事務局がある東京で互いに交流できる“都市・農山村交流コミュニティ”をより実践的に展開していきたいと考えます。

エピソード

◎夏の高温など天候不順のため、白菜やキャベツなどの苗の定植ができず遅れてしまい、秋の植え付けとなってしまいました。また、キャベツの収穫は2月の初旬に予定していましたが、途中でイノシシの被害にあってしまいました。

◎生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）開催を記念した“命のつながり＝生物多様性”をテーマとした森の学校の写真展を開催。月島の方々や地元中央区の人々など多くの方々から反響を得ることができました。

◎3月11日の東日本大震災のため、3月17日（木）に予定していた大学生とのコラボによる「もんじゃワークショップ“MONJA de 地域づくり”」が中止になりました。

◎開墾した水田での無農薬の黒米は、思った以上の収量で、地元の農家の方々も驚かれていました。「これなら2～3年は、肥料も必要なくイネを育てられるね」と農家の方も喜んでいます。キャベツは駄目になりましたが、こうした黒米を使った新しいもんじゃにチャレンジしていきたいと思います。

◎2010年の春に、南斜面に植えた小麦は2kg程の収量でしたので、2010年の秋は全て種籾としました。これが大正解で、小麦畑は一面の“麦秋”の風景が広がりました。しかし、放射能汚染が心配で、この小麦をどう使っていくかが、また新たな課題となりました。

今後の予定

地道に交流を深め、一歩一歩前進

「月島のもんじゃを作るときに出る野菜クズを堆肥にし、那珂川で作物（キャベツや白菜）の苗を育て、育った作物をもんじゃのお店で使う」、こんなストーリーを実験しています。私たちが提案させていただいた後に、もんじゃ振興会で生ゴミの堆肥化について計画があがったようですが、回収システムの面などで実現には至っていません。まずは、小さな試みから実現していきたい、との思いは会長も私たちも同じで、この試みがいずれは全てのお店に広がっていくことを目標に実施します。
また、那珂川の竹で作った竹炭を粉にして、それをもんじゃに混ぜ“竹炭もんじゃ”、森の学校で今年収穫できた古代米なども粉にして“古代米 米粉もんじゃ”にできたらとも考えています。
こうした取り組みには、もんじゃのお店の足並みが揃わないとできないことです。「まずは、できるかたちで、できることから始めましょう」、「月島で提供するのはイベントの時がいいですね」などと、会長と話をすすめながら、一歩一歩前進できるよう交流を深め合い、お互いの信頼を築いていこうとしています。

福島の原発問題

森の学校のある那珂川校舎は、福島の第一原発から直線距離で約100 kmという所にあるなかで、自然体験、里地里山の再生、次世代の育成をテーマとした活動を、この場所でどのように進めていくか大きな課題に直面しています。
地元行政やJAからの発表では野菜なども安心して作って食べて良いとのことですが、果たして本当に安心できるのか、もっと多くの情報を入手し、分析し、この課題解決を地元の生産者の方々と共有していく必要があると考えます。
森の学校の活動は、子どもたちの未来を大切にしたいと思う気持ちが根本にあります。しかし、その子どもの未来が危機に晒されている今、早急にすべきことの選択に悩みます。
そうした中で、地元大学にも協力を仰ぎ、放射線のより正確な定期的な把握を行い、地元生産者と情報を共有しながら、森の学校の早期再開を目指します。

月島の子どもたちは、那珂川町でどんな風に月島を紹介しようかと、話し合って、リハーサルをして、さあ、本番です。全員で、ひとことずつ話をします。